

援助の現場で考えたこと

山 岸 秀 信

私が青年海外協力隊の隊員としてアフリカに来て、すでに2年が過ぎた。最初の1年はエチオピアに、そして今はケニアにいる。通常、2年間の任期中に派遣国を変更することは規則によりできない。しかし私の場合、昨年5月の政権交替劇とその後の混乱で、活動の継続が困難と思われたため、振り替え派遣という形でケニアに来た。この2年余りの間に、協力隊の隊員が派遣国の政情不安により、国外へ一時避難したり、撤退するケースがエチオピア以外にもいくつかあった。活動を途中で断念して去るのは辛いことだが、考えようによっては、2つの国を見て幸運とも言えるかもしれない。私などエチオピアとケニアという、国境を接しながらも様子の大きく違う国を見る機会を得た。エチオピアには、訓練期間を含めても9ヶ月しか滞在せず、ケニアもようやく1年過ぎたところである。いずれも短い期間だが、その間に見聞したことは日本で想像していた様子とは違うことが多かったし、再認識あるいは新たに考えさせられたこともあった。その内のいくつかを、自分の体験を中心にして挙げてみることにする。

私の専門職種は野菜栽培である。エチオピアでの任地は、アジス・アベバから西へ800 km 弱、スーダンとの国境に近いガンベラという町だった。熱帯低地にあり、暑く乾いた町という印象が強く残っている。高地の端にあたる山並みを眺めながら、「あの上はさぞ涼しかろう」と毎日のように考えていたものだ。この町にある農業省農業開発局ガンベラ事務所が私の職場で、1990年9月より7ヶ月間、野菜と果樹の担当者として働い

た。日本で受け取った資料には「野菜の新品種導入のための栽培試験と農民への技術的アドバイスが主な仕事」とあった。農民たちと収穫を喜び合う自分の姿を想像したし、当然そうなるものと思っていたのだが、実際にしたことといえば、野菜の試験計画書作りと勝手に実る果物の収穫くらいのもので、何もなかったに等しい。雨季に間に合うように計画書を作って上司に見せたところ、返って来た答えは「金がないから待て」だった。農場を維持するのが精一杯で、新たに栽培試験を始める余裕はないと言う。その年の農業省全体の予算が大幅に減らされたため、ガンベラのような地方事務所への割り当ては極端に少なかったのである。今考えるとあの時期は、国内に残っている金と兵力をかき集めて、必死の反撃を試みようとしていた頃だったのだろう。何度交渉しても結果は同じで、そうするうちに雨季は終わってしまった。ただこの場合、金だけが原因だったわけではない。私のやり方のまずさも加わっての結果である。途上国に金がないのは当たり前、まして30年も内戦が続いているエチオピアに豊富な資金があるわけではない。ある程度覚悟して行ったものの、自分の予想以上に悪いことを知って、少なからずショックを受けた。気負いが空振りに終わったことで、焦る気持ちが先に立ってしまったのだ。もう少し冷静になれば、別のやり方も見つけれられたかもしれない。この点は残念である。

途上国で援助活動に携わる者には、金の悩みがつきまとう。特に協力隊のように、配属先のスタッフの一員として活動する形態の場合、派遣国や

配属先の経済状態の影響を受けやすい。それを補うために、「隊員支援経費」というものがある。これは、予期しない資金難の場合に隊員活動を支援する制度で、上手に利用すれば効果は大きい。しかし安易に使えば、金や物を運んで来るサンタクロースだと思われてしまう。私も利用しようかとも考えたが、上司の明らかにそれを期待している態度を見て思い留まった。一時的にはそれで凌げても、私が帰った後はまた元に戻ってしまうだろう、意味がないと思ったからである。程度の違いはあるにせよ、同様の問題を抱えている隊員は多い。「民衆レベルでの協力活動」は協力隊の長所でもあり、短所でもあると思う。他国の援助形態にも、それぞれ長所と短所があるはずである。「最も効果的な援助形態とはどんなものなのか、また、どこまで手を貸すべきなのか」。これは昔からあるテーマであろう。自分なりに考えてみることはあるが、結論らしきものにはいつも程遠い。

私がエチオピアからケニアに移った理由は、冒頭に書いた通りである。アジス・アベバの協力隊事務所から「国外へ避難する可能性あり」との連絡を受けたのは、1991年3月18日のことだった。農民への巡回指導を始めた矢先、まだ名前も覚えていない頃だ。皮肉なことに、ガンベラ郊外の道は、作物を栽培できる雨季には池のようになってしまい通れない。ようやく水が引く頃は、乾季の真最中なのである。長いこと待たされた後、これからという時で非常に残念だった。アジス・アベバが陥落した時はすでに日本におり、テレビのニュースの中で、見覚えのある景色が炎に包まれているのを、複雑な思いで見た。幸い、協力隊の隊員は全員無事に避難できたが、あの前後には、強盗に殺された欧米のボランティアも数人いたらしい。

援助する側にとって、政情不安は大きな障害となる。特に戦争は、その最大級のものだろう。早魃の被災者への救援物資が、道路の安全が確保できないために港に山積みになったままの例や、プロジェクトが軌道に乗り始めたのに、撤退を余儀

なくされた例など、数多くある。協力隊も以前は、エチオピアの各地に入っていたが、現在はアジスアベバ市内に限られている。スーダンへの派遣は始まって2年余り、人数も少しずつ増えているものの、ハルツーム市内とその他一部のみらしい。隊員を派遣している日本政府としては、危険のある地域には送れないと判断するのは当然だろう。これは協力隊に限ったことではない。前項で金の問題を書いたが、平和はそれ以前の最低条件なのだと思う。幸いにも、今のところケニアは落ち着いている。来年の総選挙に向けて荒れるとの予想もあり、この先どうなるかはわからない。何もないことを祈りたい。

先日、家に遊びに来たケニア人の友人に、ある雑誌を見せた。「アフリカの角」地域の内戦が特集されており、彼にコメントを求めると「あいつらはクレイジーだ、戦争が好きなんだよ」と答えた。もちろん真剣に言ったわけではなく、答えようがなかったのだと思う。好戦的な部族というのはあるかもしれないが、戦争好きの国民というのは聞いたことがない。エチオピアの友人たちも、戦争の終結を望んでいた。一般の民衆も戦場の兵士たちも、うんざりしているに違いないのだが、なぜか終わらない。現在ケニアには、エチオピア・スーダン・ソマリアの各国から、多数の難民が流れ込んでいる。正確な数字は調べようもない。陸路で国境を越えて来る者が多いが、海路あるいは空路で来る者もいる。最近ナイロビ市内で、ソマリア人らしい人達をよく見かけるようになった。直接訊いたわけではないが、戦火を逃れて来た人がほとんどらしい。そのわりには上等な服を来て（私などよりも、ずっと良い格好をしている）、中には高級車に乗っている人もいる。彼らを難民と呼べるかわからないが、難民の中にも金持ちと貧乏人がいるようだ。さらに、極貧の階層は逃げ出すこともできずにいることを知って驚いた。

私は難民キャンプを訪れたことがないので、どんな様子なのか良くはならない。私の任地だったガンベラから数十km離れたところに、スーダンか

らの難民を収容するキャンプがあった。見てみたいとは思ったが、外国人が勝手に町から出て歩き回することは許されず、近くの町へさえも行ったことはない。アジス・アベバに行く時にも許可証を必要としたくらいである。聞くところによれば、その難民キャンプには部外者に知られてはまずい事実が山ほどあったらしい。許可を願い出てもまず無理だったろうし、内緒で近づいたのが知れば、何らかの処罰があっただろう。したがって、私のイメージする難民とキャンプは、ひどく曖昧なものである。それは、やせ細った子供を抱いた母親が、食糧の配給に列を作っている所、というテレビで見た光景だ。あの光景が嘘だとは思わない。しかし、難民を生む原因は軽視されがちだと思う。正しくは、その原因を生み出す原因や背景がである。早魃や内戦が直接の原因と容易に想像できて、その先まではとても及ばない。今こうして内戦や難民の話を書いている私も、実際は何もわかっていないのだろう。不勉強のせいでもあるが、この地域にある問題の中には、島国で単一民族・信仰心の薄い日本人には理解しにくい性質のものもあると思う。それらを、わかり易く正しく伝えられれば、解決に向けて一歩でも進めるはずだとも思っている。

短い期間ではあるがエチオピアとケニアに住ん

でみて、そこに存在する諸問題の根深さ、複雑さをごく一部分だけでも見る事ができた。あまりにも大き過ぎて、一部分しか見えなかったと言った方が正しいだろう。エチオピア・スーダン・ソマリアで続いている内戦は、確実に発展の足かせになっている。「平和を」と第三者が言うのは簡単でも、実現させるのは難しい。だからといって、ただ見ているだけでは一向に前進しない。「最も効果的な援助とは」というテーマも、やはり難しい。それでも、何とか考えなければならない。一人では無理だが大勢で考えれば、より良い方法が見つかるはずである。本学会の趣意書の中に、「既存の学問領域をこえ」とある。その総合的研究の成果を基にして、より効果的な援助を模索する者達に、何らかのアドバイスをいただけたらと考えている。

私にとって、エチオピアは魅力あふれる国である。その歴史といい文化といい、興味をそそられるものが多い。いつか機会があればまた訪ねてみたいし、関心のある分野を通して、自分なりに接してみたいと思っている。

本学会の御発展をお祈りします。

〔やまぎし ひでのぶ〕

青年海外協力隊、在ケニア〕